

博士論文「伝承の民俗学的研究—その視座と可能性—」

要旨

加藤 秀雄

本研究では、民俗学の研究対象とされてきた伝承概念の問題点と可能性を明らかにし、この概念を民俗学の有効な分析視角として再生させることを目指す議論を行った。そのために掲げた課題は以下の4点である。

まず伝承概念の持つ問題点を浮き彫りにし、それがどのような背景によって生じたのか明らかにする課題を設定した。伝承概念の問題点とは端的に言えば、これを「変わることなく伝えられてきたもの」、あるいは「時代の変化によって衰微・消滅しつつあるもの」と見なすような視点の存在である。しかし民俗学の歴史を紐解くと、この概念が登場した初期段階においては、これを上記のようなまなざしで対象化する視点は存在せず、むしろその「変化」に注目する議論が行われていた。これは伝承が動態的概念から静態的概念へと変質したことを暗示しているが、その背景を明らかにするのが、本研究の1つ目の課題である。

2つ目の課題は、伝承概念がどのような問題意識によって提示された概念なのかをあらためて確認し、その現代的意義を論じるというものである。民俗学は伝承を対象化することで一体何を明らかにしようとしてきたのか。このことを確認し、現代における伝承の可能性をめぐる議論へと発展的に展開するのが、この課題の狙いである。

3つ目に、伝承が静態的存在ではなく動態的存在であることを具体的事例から示し、この概念の位置づけを明確にするという課題を設けた。これは従来と異なる新たな伝承観を示すことにつながり、本研究の主題である伝承研究の視座を確立するものとなる。

最後に、伝承の変化をとおして私たちを取り巻く時代状況を描出し、その中で伝承にいかなる可能性があるのか明らかにするという課題を設定した。伝承が動態的存在であるとするれば、それは常に変化し続けていることになる。そして、その変化は特定の時代状況に強く規定されるが、その中で伝承にいかなる可能性があるのかということ本研究では考察し、それを結論として示した。

以上の課題に取り組むにあたって、本研究は3部構成をとっており、それぞれ3つの章からなっている。まず【第一部 伝承概念再考】の「第一章 伝承をめぐる研究史」では、伝承の研究史を整理し、この概念が抱える問題点と可能性の概要を示した。つづく「第二章 伝承概念の脱／再構築のために」では、前章で示した伝承概念の問題点が、どのようにして生じたのか明らかにし、その上で伝承研究の視座と目的を明らかにすることを試みている。

「第三章 伝承研究の現代的課題—柳田国男による自治論の再検討」では、柳田国男が伝承に見出した可能性を掘り下げて考察し、伝承研究の目的の1つが「自治」であったことを明らかにした。ここにおいて、伝承が「歴史」と「自治」の2つのテーマを柱とする概念であることが示されるが、本章の「自治」をめぐる議論は、現代社会における伝承の可能性を

論じる【第三部 現代社会と伝承】の内容へと接続されていく。

【第二部 伝承の仕組みと動態をめぐる考察】では、第一部で示した「動態的存在として伝承」の実態を具体的なフィールドの事例をとおして見ていった。その導入となる「第四章 役割交替と伝承の相関性—主婦権とトウヤのワタシ儀礼周辺から」では、日本各地に伝えられてきた「～ワタシ」と呼ばれる民俗語彙と儀礼に注目し、特定の個人、集団の役割交替が伝承と深く関わるものであることを示した。つづく「第五章 伝承意識と伝承の変化—芸予諸島・鶴島の氏神祭祀を事例に」では、瀬戸内海芸予諸島・鶴島で伝承されてきた氏神祭祀を取り上げ、この島の人々が持つ「伝承意識」と「伝承の変化」が共存する状況を取り上げた。この共存は、伝承の持続と変化が実は対立する問題ではないことを示唆している。本章ではその実態を見ていくことにより、伝承をめぐる認識論的な対立を乗り越えるような、新たな伝承観を提示した。「第六章 伝承の仕組みと動態をめぐる考察—芸予諸島・鶴島における「歴史」の構成」では、前章に引き続き鶴島の事例を取り上げ、この島の人々の「世代交代」が伝承の動態にどのような作用をもたらすのか見ていった。本章の事例は、伝承の仕組みと動態の要因を示すものであるが、それを把握する分析視角をここでは議論し、本研究における伝承への視座がどのようなものであるかを明らかにした。

【第三部 現代社会と伝承】では、伝承の変化をとおして、私たちの生きる時代状況を描き出し、その中で伝承にいかなる現代的な可能性があるのか示すという課題に取り組んだ。まず「第七章 伝承の変化に見る高度経済成長—千葉県浦安市の事例から」では、千葉県浦安市の伝承の変化から高度経済成長期の時代状況を描き出すことを試み、近代化と伝承の関係を考察した。つづく「第八章 システムと伝承—平成の市長村合併を事例に」では、近現代の時代状況を特徴づける「システム」について、「平成の市町村合併」から考察し、伝承が「自治」の中で果たしていた（いる）機能を明確にすることを試みた。第三部の最終章である「第九章 伝承と自治の再生に向けて—震災被災地における中間集団と相互扶助」では、東日本大震災の被災地の状況を事例としながら、前章で論じた「伝承と自治」というテーマが現代においてこそ問われるべき問題であることを示し、その上で伝承の現代的な可能性を論じた。以上、第三部の各章の内容は、システムと生活世界の伝承を対置させることによって私たちが生きる社会と時代の特徴を浮き彫りにし、それを相対化するものとして伝承を位置づけることを目指すものである。

以上の議論をとおして、本研究では伝承研究の視座と目的、そして可能性について以下のように結論づけた。まず伝承研究の基本的視座は、「伝承の動態への注目」である。伝承概念の問題点は、その通時的同一性の規定にあり、これが伝承を静態的概念として扱うことにつながったことは、本研究の第一部で確認したとおりである。本研究は、静態的概念に変質した伝承を動態的概念として再生するためのものであった。次に本研究では、伝承研究の目的が「歴史」と「自治」であることを明確にした。伝承は、上位の世代から下位の世代に伝えられる知識や経験、あるいはそれを伝える行為といった辞書的な定義からは見えてこない、「書かれなかった歴史の叙述」と「生活世界の自律性の確保」という問題意識を包含す

る概念である。そしてここでいう「生活世界の自律性の確保」、すなわち「自治」を再活性化する原動力になるというのが、現代社会における伝承の可能性である。

以上の議論をふまえて今後、取り組むべき課題は、近年の新しい民俗学の対象、方法を模索する議論と伝承研究をどのようにして接続させるかというものと、多様な存在が「共に生きる」上で、伝承がいかなる意味、あるいは機能を持つのか明らかにすることである。こうした課題に取り組むことで、伝承研究は更に深化し、今後の民俗学の理論と方法をめぐる議論の発展に寄与するものとなるのである。